

にじ

謹賀新年 新年のご挨拶2013

..... P2~P6

- 新年のご挨拶：畠山伸介企業長、武田明雄病院長 P2
- 新年のご挨拶：深田順一副院長・ITセンター長・臨床試験管理センター長
谷木利勝副院長・感染対策センター長 P3
- 新年のご挨拶：吉川清志副院長・総合周産期母子医療センター長、医療安全管理センター長
西岡豊地域医療センター長 P4
- 新年のご挨拶：村田厚夫救命救急センター長、森田荘二郎がんセンター長 P5
- 新年のご挨拶：岡部学循環器病センター長、山下元司副院長・こころのサポートセンター長 P6
- 第50回高知医療センター職員による学会出張報告
第53回日本児童青年精神医学会（児童精神科 泉本雄司 医師） P7
- 高知医療センター・イベント情報 P8

1

JANUARY.2013 Vol.87

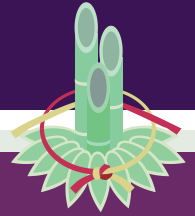


ドクターヘリから眺める高知医療センター周辺の上空写真（提供:救命救急センター齋坂医師）

高知医療センターの基本理念
医療の主人公は患者さん

- 高知医療センターの基本目標
1. 医療の質の向上
 2. 患者さんサービスの向上
 3. 病院経営の効率化

謹賀新年：新年のご挨拶 2013



企業長 畠中伸介

新年明けましておめでとうございます。

高知医療センターが平成 17 年 3 月 1 日に開院して、はや 8 年が経過します。

この間「医療の主人公は患者さん」を基本理念に、がんセンターをはじめ 6 つのセンターを中心に高度で質の高い医療を実践するとともに、患者さんが暮らす地域との連携を強め、信頼を頂くことが第一だと考え病院運営に当たっています。

その中で地域の医療機関の皆様の窓口となっており、地域連携室の充実に取り組み、最近では紹介率が 60 パーセントを超え、逆紹介率も 80 パーセントを超えるまでになってきました。

こうした数字は、これまでの取組みが地域の医療機関の皆様に評価され、信頼を得てきていることだと思っています。地域医療機関の皆様のご支援と協力がなくしてできることではなく、感謝申し上げます。

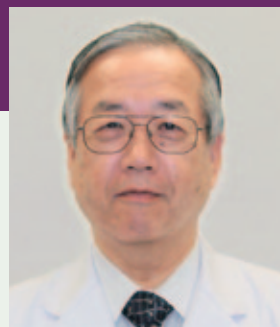
また、東西に長く多くの中山間地域を抱える高知県

にとって、地域との時間距離が大幅に短縮されるドクターヘリは、地域の皆様にその活躍が期待され、搬送件数は年間 400 件近くになっています。最近では、ドクターヘリで命が救われたと言う地域の声も多く聞くようになりました。こうした声は、一人でも多くの県民の命を救いたいという強い思いでがんばっている職員の励みになっています。

今後とも地域との連携を強め、地域の信頼が得られる高知医療センターとなるよう職員が一丸となって取り組んでまいり所存です。

さて、昨年 4 月に開設しました精神科病棟ですが、この 1 月から運営を縮小せざるを得なくなりました。患者さんをはじめ精神科病院、消防機関など関係する皆様に大変ご迷惑をおかけする状況になりまして申し訳なく思っています。県内で当院のみの児童思春期専用病床の運営はこれまでどおり行いますので、関係する皆様にはご理解とご協力をお願い申し上げます。

本年も県民の皆様のご期待に応えるよう全力で取り組んでまいりますのでよろしくお願い致します。



病院長 武田明雄

新年明けましておめでとうございます。

昨年 4 月に病院長に就任し、初めての新年を迎えています。就任以来、新設された

「こころのサポートセンター」を含めた 6 つのセンター機能の充実とともに、平成 22 年に策定された「医療の質の向上」、「患者サービスの向上」、「病院経営の効率化」を目的としたアクションプランの完成を目標に職員あげて努力してまいりました。平成 23 年度単年度黒字達成や、昨年度診療報酬改定による増収等経営的には好転していますが、まだまだ予断は許しませんし、精神科医療に関しては、医師の退職により今年から児童・思春期を主体とすることになり、皆様方のご期待に反することになったことを申し訳なく思っています。現在、アクションプランにつながる新中期計画を策定中で、「救急、手術等急性期機能強化し、県民へ

の高度医療の提供」、「周産期医療、精神科医療、災害医療等地域の不足医療の提供・強化」、「院外連携の強化」等より具体的な取り組みを検討中です。言葉に踊らされることなく着実に実行していきたいと思っています。

また、就任以来ソーシャルワーカー - 等地域医療センター職員とともに、高知市医師会や郡医師会の理事会出席、市内連携病院訪問、個人的には自治医科大学顧問指導委員として自治医大卒業生が勤務している地域病院、診療所を訪問しており、地域の医療機関の皆様方とお互い顔の見える、本音の言える関係を築いていきたいと思っています。院内体制においても「くじらネット」の充実を図り、紹介に対してよりいっそう迅速に対応できるよう救急を含めた診療科間の連携を深めていく所存です。よろしくお願い致します。

副院長・ITセンター長 臨床試験管理センター長 深田順一



皆様、新年明けましておめでとうございます。皆様におかれましては健やかな新年をお迎えのことと、心よりお喜びを申し上げます。日頃は高知医療センターの地域医療連携の取り組みに対して深いご理解とご支援を賜っておりますこと、この場を借りて厚く御礼を申し上げます。

さて昨年、入れ替えました院内コンピューター情報システムですが、お陰様でほぼ順調に動いており、本年はシステムのさらなるバージョンアップも予定しています。ただこの入れ替えに伴って始めました「くじらネット」につきましては、その後、加入医師数、そしてこのシステムを用いての閲覧患者数とも伸び悩み気味で推移しています。今年はこの「くじらネット」に加え、本院医師が病院外に居ても、必要に応じて病院の電子カルテを閲覧して診療に参加できる「リモートカルテ」システムを動かし始める予定です。限られ

た医療資源の克服に留まらず、これまで為し得なかった効率的な医療の構築を目指して、情報管理には万全を期しつつ、ITのフル活用を今後も図ってゆくつもりです。

一方、臨床試験管理センターの方は昨年末に独立行政法人医薬品医療機器総合機構から、本院の推進する治験実施状況について、特段の問題もない旨の評価もいただきました。今後はこれまで主力であったがん領域に加え、代謝・循環器領域、さらには精神疾患治療薬まで、治験の範囲を広めていきたいと考えています。

また、「にじ」の編集は今後とも、本院の医療の実体と方向性をご理解いただく場とするべく編集を続けてゆくつもりです。どうぞこれまでと変わらぬご支援のほど、よろしくお願いいたします。

新しい年が皆様方にとりまして幸多い年になりますよう祈念申し上げ、この場を借りて新年のご挨拶とさせていただきます。

副院長・感染対策センター長 谷木利勝



新しい年を迎え、皆が元気に過ごせる1年となるように願い、ご挨拶いたします。

平成24年は当院で3つの大きな事業がありました。2月：電子カルテシステムの全面入れ替え、4月：精神科病棟開設、5月：ドクターヘリの病院敷地内基地完成、です。費用はそれぞれ約14億円（5年間の維持費含む）；約8億円；約4億円でした。医療機器に関する委員会での購入希望のヒアリングでは、機器のあまりの高額さに驚きました。当院開設時からの機器全般の老朽化や、49台ある超音波検査機器に毎年追加購入があること等、大きな問題点です。ベッドコントロール対策では、退院・転院先の確保のために在宅支援の将来構想が必要と思われました。看護師や医師事務作業補助者等の増員には、まず応募者確保対策が必要なようです。また当院には専門分野に長けた人材が多いので、それぞれがいつでも講義・講演ができるような「出前講座」制度の確立を望んでいます。最近になって、平成17年からのすべての病院経営指標を年代別に数値にして、グラフ化して

もらいました。今後はこの解釈や分析が大事であると思っています。

私個人としては、診療報酬国保審査委員に加えて国保指導委員になり、県内の病院や診療所の指導にも慣れてきました。自分の専門分野以外の案件も多く、専門外疾患の勉強になっています。また趣味の剣道では24年8月に、平成17年から挑戦していた剣道7段に、ようやく合格できました。これからも健康とストレス発散のため、続けていくつもりです。本年もどうぞよろしくお願いいたします。



副院長・総合周産期母子医療センター長 医療安全管理センター長 吉川清志



已年、明けましておめでとうございます。

先生方にこの「にじ」が届く頃は、お正月気分もすっかりなくなっているかもしれません。先生方にとって、昨年はどのような年であり、今年はどのような年になりそうでしょうか。私は、日々の仕事を片付けているうちに還暦の辰年が過ぎてしまいました。今年も同じような一年になりそうですが、健康に留意しながら精一杯働きたいと考えています。

昨年の前半は県内で多くの超低出生体重児（出生体重 1000g 未満）が出生し、2 件の県外搬送がありましたが、後半は落ち着いていました。総合周産期母子医療センターでは、高知県内で完結する周産期医療を目指して、平成 25 年 4 月から NICU（新生児集中治療室）を 3 床増床します。さらに、将来の需要に対応するために GCU（新生児治療回復室）や産科病床の増床も検

討しており、高知県で安心して子どもを産み育てることができるようスタッフ一同頑張っています。ハイリスク妊婦や病的新生児が集中した場合、当院に入院できない場合がありますが、そのような場合でも他の医療機関と連携し県内で完結するように努力しますのでご理解とご協力をお願いします。

私は、昨年 4 月から医療安全管理センターの仕事も行っています。医療現場では種々のレベルの医療事故が発生していますが、一般の方は医療事故＝医療過誤（ミス）と考えられ誤解があると思います。私たちは、患者さんや社会に対して隠さない、組織として事故防止に努め安易に個人の責任に帰さない、そして患者さんの安全を守らなければならないと考えています。医療センターのすべての部門のたゆまぬ努力により、患者さんと同時に職員にも信頼される高知医療センター文化を築いてゆきたいものです。

皆様、本年もどうぞ宜しくお願いします。

地域医療センター長 西岡豊

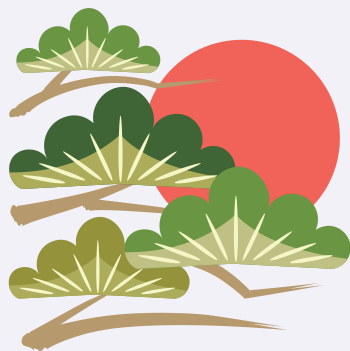


謹んで新春のお喜びを申し上げます。皆様すこやかに新春をお迎えのことと存じます。

日頃は、高知医療センターとの医療連携にご理解とご支援を賜りまして、厚くお礼申し上げます。

地域医療センターでは、昨年も医療従事者の方々に向けての研修会（地域医療連携研修会・講演会・症例検討会等）を積極的に開催し、各医療機関、郡市医師会の訪問等を精力的に行い、より顔の見える開かれた地域医療センターを目指してきました。登録していただきました医療機関への登録医証の発行とともに、連携医療機関一覧の院内掲示もリニューアルし、おかげさまでオープンシステム登録医に登録していただきました地域医療機関の先生方も 567 名に達しました。また、高知医療センター中期経営改善計画アクションプランとしての「地域医療センターの充実」、「地域医療連携強化による紹介・逆紹介の促進による患者数の確保」に積極的に取り組み、目標達成に向かって努力を続け、昨年度の紹介率、逆紹介率はともに一昨年を大幅に上回りました。昨年も地域医療センターでは、医療連携強化に向けて様々な新しい取り組みを行って

きましたが、特に国の地域診療情報連携推進事業により進められ、「複数病院での共同利用とデータ共有による、1 患者 1 カルテの実現」を目指して昨年 4 月より導入しました WEB 型電子カルテ「くじらネット」においては、地域の医療機関の先生方が当院の電子カルテや医用画像などを閲覧できることにより診療情報を容易に共有でき、より一層の地域医療連携強化を実現できると期待されています。現在、54 医療機関、73 名の先生方が「くじらネット」を利用されておりますが、今後ますます多くの先生方にご利用をお願いしていきたいと考えています。今年も、高知県の基幹病院の地域医療センターとして、地域医療機関及び患者さんの安全・安心・信頼の確保に向けた地域医療連携を機能させる責務があると考え、精一杯の努力を重ねてまいります。旧年中と同様、今年もご指導ご鞭撻の程よろしく申し上げます。





救命救急センター長 村田厚夫

皆様、新しい年を迎えて、「今年こそは！」と、様々な「夢」を描かれていると思います。

小生は、もともとスポーツばかりやっており、その分、文学とはあまり関係がありませんでした。しかし、高知に来ることが決まった頃、ちょうど司馬遼太郎さんの「坂の上の雲」が始まり、翌年には「龍馬伝」もあり、日本の幕末から明治時代を勉強する機会を得ました。

以前から、サミュエル・スマイルズ著の「Self Help (自助論)」（明治維新当時は、「立身出世伝」と訳されて、当時の若者達の正に「参考本」になっていたようですが）は持っていて、時々読んでいました（特に落ち込んだときなど）。それくらい「勇気づけられる本」の一つです。

その司馬遼太郎さんの多くの書を読むのは無理ですが、DIGEST 版や、司馬遼太郎さんに纏わる話が書かれた書は、未だに読み続けています（それくらいたくさんあるのですが）。四国、高知に関係するとしたら、「坂の上の雲」「空海の世界」そして「龍馬伝」などでしょうか。読んでいるうちに、これまで何度か、香川県善通寺にある陸上自衛隊駐屯地には行ったのに、その隣の肝腎の「善通寺」には一度も行っていないことに気づきました。空海ゆかりのお寺です。今年こそ、駐

屯地を訪問する際には、是非とも参拝したいと考えております。

さて当院救命救急センターは、高知県ドクターヘリを中心に救急医療活動が続けておりますが、ご存知のように、救急専従医の数はまだまだ不十分です。また、各地から来てくれているので、決して「一枚岩」ではなく、それぞれが「個性」を持っています。そんな部下をまとめて、高知県の救急医療・僻地医療を充実させるには、「部下」を動かさなければなりません。そのための「座右の書」もいくつかあります。

まず、1956年頃に書かれた「リーダーシップ - アメリカ海軍士官候補生読本」。良いことばかり書かれているし、今の日本でも十分に「深い意義」を持っています。

今、一番気に入っている言葉は、「坂の上の雲」で出てきたと思いますが、渡哲也さん演じる東郷平八郎が、本木雅弘さん演じる秋山真之に言い聞かせる言葉です。

「将たるもの、自分で下した決断を、神のごとく信じらんや兵は動かせん」

深い意味を持っています。

そして、部隊をまとめるには、部下にいつも言っている聖書からの引用もあります。

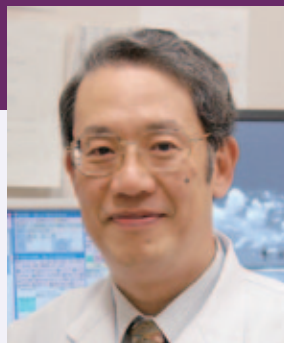
Judge Not, Therefore You Will Be Judged.

これも、部下には守ってもらいたいと思っております。

最後に、「坂の上の雲」の書き出し

「まことに小さな国が、開花期を迎えようとしている」

これもすばらしい文章です。我が日本は、その後、坂の上に来たつもりが、崖下に落ちていきましたが。我が救命救急センターがそうならないためにも、スタッフ一同が「志」を持って、自分に与えられた「使命」（人の命を守ることに全力を尽くすこと）を忘れないでほしいと、ただただ願うばかりです。



がんセンター長 森田荘二郎

新年明けましておめでとうございます。昨年中はがんセンターに多大なるご支援、ご協力を頂きまして御礼申し上げます。

昨年末には、ITセンターとの協働により、当院で治療を受けられた患者さんの予後調査方法を確立し、2005年、2006年の治療成績（粗生存率）をHPで公開することができました。本年はさらに詳細に検討を加え、ステージ別、治療法別のデータを公開する予定としております。また、初期治療の選択に難渋する症例を多職種で検討する「がんセンターボード」も順調に稼働し、診療に貢献しております。

一方、がんセンターにおきましては、昨年大きな動きがありました。腫瘍内科で抗がん剤治療に携わってくれていたがん薬物療法専門医2名があいつぎ退職しました。抗がん剤治療のレベル低下が懸念されましたが、1名の腫瘍内科医を中心に、日本がん治療認定機

構がん治療認定医8名（昨年3名が認定試験合格）がサポートすることにより、治療レベル、治療件数を落とすことなく診療が継続できております。本年の最優先の対応事項として、腫瘍内科医の新規獲得、および外来化学療法室の底入れを進めてまいります。

また、本年は開院時に設置した放射線治療機器が耐用年数を迎えます。さらに高知県では大学にしか整備されていないPET-CTが、検査件数の増加に対応できない状況になっており、当院での設置を望む声が上がっております。これらの状況を踏まえて、最新の放射線治療装置の導入、PET-CTの整備なども含めた新しいがんセンターのあり方を検討していく予定となっております。

このような激動の中ががんセンターはありますが、さらなる発展のためには地域の先生方のご支援がなにより重要です。本年も昨年同様、ご指導、ご鞭撻を賜りますよう、心からお願い申し上げます。

循環器病センター長 岡部学



謹んで新年のお慶びを申し上げます。

旧年中は、皆様方の多大な御支援をいただきながら当循環器病センターが日々の医療に従事出来ました事を心から感謝申し上げます。

心から感謝申し上げます。

当循環器病センターは、1年・365日・24時間循環器専門医が常駐する県下で唯一の施設として、専門医による循環器疾患救急治療を提供してまいりました。受け入れ直後の診断・カテーテル治療から最終的外科手術治療まで、循環器専門医による切れ目ない専門治療で多くの大切な命を救ってまいりました。また、循環器病センターダイレクトコールにより循環器救急患者治療のさらなる迅速化も確実に進んでおります。今年も、この循環器専門医による高度救急救命医療体制を更に発展強化してまいります。

当循環器病センターの治療は、低侵襲性・安全性を目標に常に進化しております。

代表的な「低侵襲治療」である心筋梗塞・狭心症、不整脈、末梢血管病変に対するカテーテル治療で昨年も引き続き全国トップレベルの症例数と成績を収めま

した。また、従来は開胸・開腹手術治療の対象であった大動脈瘤に対するステントグラフト・カテーテル治療も軌道にのり、治療困難な多くの重症患者を救命できるようになりました。さらに、心臓弁膜症もこの低侵襲治療の適応として積極的に行っております。

当循環器病センターにおきましては、従来の内科的治療・外科的治療に加え内科・外科治療をミックスしたハイブリッド治療も重要な治療手段としており、これらの治療法の中から一人一人の患者様に最適な最新の循環器治療を提供しております。

今年も、これら当循環器病センターの完成度の高い最新の治療システムを高知県民の皆様、地域医療機関の皆様方により効率的に利用していただく事を目標に努力を重ねていきたいと考えております。

今年も一層の御指導・御鞭撻・御支援をいただきますよう心からお願い申し上げます。



副院長 こころのサポートセンター長 山下元司



皆様、新年明けましておめでとうございます。皆様におかれましては健やかな新年をお迎えのことと、お喜び申し上げます。日頃は高知医療センターに対して

ご理解、ご支援を賜っておりますこと、厚く御礼申し上げます。

こころのサポートセンターは昨年4月に開設され、もうじき1年を迎えようとしています。これまで高知県には児童思春期の精神障害の方が入院出来る専門の病棟がありませんでした。そうしたなかで病棟開設することが出来、県民・市民の皆様方の期待に沿えたことは私たちの大きな喜びでした。現在は10人近くが入院しており、精神科医師2名と限られたスタッフにしては限界に近い活動をしています。外来診療も活発に行われており、ますます多忙となっております。

精神科医師は不足しており、児童精神科医師はさらに不足しているのですが、なんとか新しい精神科医師にも参加願って児童思春期精神障害の治療を発展させてゆきたいと考えています。

成人の精神科入院も受け入れてきたのですが、担当していた精神科医師が1人また1人と退職し、代わりの医師が補充出来ないためセンター長1人が成人担当となり、1月から入院患者の受け入れを休止することとしました。1人の力では24時間365日にわたって病棟入院患者の診療を行うことは出来ないのご理解のほどお願いします。

これからの活動としては、高知医療センター本館に入院している患者にみられる精神障害の治療、本館に通院している精神障害を合併した患者の外来治療、単科精神科病院に入院している患者が骨折したときなどの治療の受け入れと入院中のサポートを主な業務としてゆきます。新しい医師が確保できるまでご理解のほどお願いします。

第50回：医療センター職員による学会出張報告

高知医療センターの職員はいろいろな学会に参加しています。そのなかから、学会レポートをご紹介します。

第53回日本児童青年精神医学会 in 東京 2012.10.31~11.2

児童精神科 泉本雄司 医師



泉本医師

10月31日から11月2日に開催された第53回日本児童青年精神医学会に参加しました。会場は、東京、永田町にある都市センターホテルと砂防会館でした。この学会は、子どもの精神科の領域では日本最大のもので、この学会の特徴の1つは、発足当初より、医師のみならず、看護師、心理士、精神保健福祉士、保育士、教育や福祉機関など、多職種への参加が多いことです。

今回の学会のテーマは、「児童青年精神科医療と発達」でした。このテーマはもちろん、発達障害を念頭において決められました。自閉症や注意欠如多動性障害、学習障害などの発達障害のある子ども達の医療機関への受診は全国的に増加しています。当院は児童精神科外来が4月から開設されていますが、9月までに初診した15歳以下の子ども約77%になんらかの発達障害がありました。不登校やひきこもり、いじめの問題、自殺の問題、そして不安障害や気分障害の背景にも発達障害が関係している場合があり、いまや、発達障害は児童精神科領域で臨床的に学術的にも関心もたれている領域です。

1日目の午前は評議員会に出席し、午後は、総会、会長講演に出席しました。会長講演は、東京都立小児総合医療センターの市川宏伸会長が行いました。日本の児童精神科医療の変遷を概観し、昭和40年代は自閉症が注目され、昭和50年代は思春期が注目され、そして平成に入って発達障害が注目されているという話でした。この領域の子どもの心の問題に関する社会の注目に関して、平成8年の神戸の少年事件を機に、今の社会では子どもも実は大変な状況にあるのだと社会が気づき、メディアの対応が変わり始めたという話がありました。最近の子どもに関する報道では、いじめと自殺が取り上げられることが多いですが、いじめによる種々のストレス反応や行動上の問題は、日ごろの臨床でよく遭遇することです。いじめに関して、子どもの認識と、学校の認識、親の認識に大きなギャップがあることが最大の問題であると思われます。

その後、「児童精神科医療とその治療の構造」というシンポジウムに参加しました。シンポジストは、東京都立小児医療センター、国立国際医療研究センター国府台病院、岡山県精神医療センター、大阪市立総合医療センターの医師と看護師でした。いずれも児童専門病棟を持つ病院で入院治療の実践が報告されました。困難な例ほど多職種間の連携と地域の教育や福祉機関との連携が重要となります。連携においては子どもに関わる各自がどのような役割をとるかが重要です。役割は職種で領域というものが本来決まっていますが、各医療機関の治療構造にはそれぞれ文化があり、例えば一般的にこれが児童精神科医の役割であると決めて動くのではなく、その治療構造の中でそれぞれ何ができるかという、その文化の中での各自の役割というものが重要である、というフロアのある医師からの発言が印象的でした。

2日目は、「自閉症と広汎性発達障害」の口演のセッションの座長をしました。全部で5演題のセッションでしたが、最初の連続する3題が、「ESDM(Early Start Denver Model)」という自閉症スペクトラム障害のある幼児への超早期療育の実践という日本ではじめての試みの報告であったため、会場は満席で立ち見ができる状態でした。現在、発達障害の支援開始は早ければ早いほど良いと言われています。そのためには、早期に診断につながるシステム、そして

そこから速やかに親と子どもを支援し、療育をするシステムの両輪が必要です。高知県では、いくつかの市町村で乳幼児健診が見直され、自閉症スペクトラム障害の早期徴候である共同注意(Joint attention)など対人関係の相互反応のあり方をきちんと評価できるようなやり方が取り入れられています。そこで疑われても、専門医への受診待機期間が長いのが問題です。発達障害の徴候がある子どもがあまりにも多いため、専門医師の充足は間に合いません。これは高知に限ったことではなく、全国的な問題です。診断後に療育を開始するという流れでは早期療育が実現できませんので、最近では、診断を待たずに早期に療育を開始するシステムを市町村で構築することの重要性が指摘されています。早期療育については、有効であることは分かっていますが、どのようなやり方が最良かということはEvidenceが少ないのです。その数少ない効果を実証されている方法の一つがESDMです。日本での普及が待たれます。

2日目は、「子どもの外傷体験と災害時のケア」のシンポジウムに出席しました。東日本大震災・大津波後に被災地で子どものこころのケアを行ってきた、そして現在も支援を継続している4人の児童精神科医がシンポジストでした。子どもへの直接的なこころのケアのニーズは早期にはなかったこと、その時期には間接的に親(周囲の大人)への支援が重要であったこと、親(周囲の大人)が落ち着くと、子どもがようやく症状をだせるようになったこと、そして、今年になって、重篤な子どもの精神科的な問題がではじめたこと、が共通する骨組みでした。児童精神科医に求められることは、災害直後に現れる子どもの症状への対応のみならず、むしろ遅れて現れるであろう症状を見越して、子どもと子どもをとりまく環境へ継続して関わっていくことが重要であるという報告が印象的でした。また、発達障害がある子とその家族は、避難所という環境が子どもに合わず、自宅や親せきの家にとどまるしかなく、避難所にいないために、食糧や水の配給を受ける権利がなくなり、スーパーに何時間も並ばざるを得なかった、といった、当然受けるべき支援が受けられなかったという報告がありました。平時においても、例えば発達障害のある子どもが何らかの身体不調のために医療にかかるときに、受診の不安から興奮するために、なかなか受診できないという実態があります。発達障害のある子どもに理解と対応に慣れた医師が増えることを期待します。また、震災時は医療機関や医師同士の連携が重要になりますが、連携の構築は結局は人と人とのつながりから生まれるのだと報告されていました。災害時の支援体制を整えるためには、平時の連携を充実させることが基本なのだとして理解しました。

3日目は、児童精神科病棟の実践の報告のポスターセッションにでました。ここでも、多職種の連携が大切だと強調されており、児童精神科の医療は医師だけでは成り立たず、コミニカル、地域の諸機関との連携の重要性を再認識しました。



会場前

日	曜	高知医療センター イベント情報 ~1月~			
12	土	第1回高知周産期セミナー (参加費無料、事前申込不要)			
		内容	一絨毛膜双胎の管理 ～胎児鏡治療の現状と展望～	講師	徳山中央病院 副主任部長・周産期母子医療センター長 中田雅彦 先生
		場所	高知城ホール2F 会議室(高知市丸の内2-1-10)	時間	19:30～
対象 医療関係者 お問い合わせ: 高知医療センター・事務局 経営企画課 主催: 総合周産期母子医療センター					
18	金	第3回高知集中治療専門医養成セミナー (参加費無料、事前申込不要)			
		内容	第1部:人工呼吸のトピックス (場所:高知医療センター2F 手術室カンファレンスルーム)	講師	岡山赤十字病院 麻酔科部長 時岡宏明 先生
		内容	第2部:安全な人工呼吸管理を行うために (場所:高知医療センター2F ころしおホール)	時間	17:30～19:30
対象 医療関係者 お問い合わせ: 高知医療センター・麻酔科(難波) TEL:088(837)3000(代)					
19	土	第3回口腔ケア研修会 (参加費無、事前申込要。下記問い合わせ先に研修日5日前までにFAXにてお申し込みください。)			
		内容	摂食・嚥下機能障害のある人、老年期にあたる人の口腔ケア	講師	愛媛大学医学部附属病院 摂食・嚥下障害看護認定看護師 藤井智恵 氏
		場所	高知医療センター1F 研修室2、3	時間	13:30～16:30
対象 看護職員、コメディカル(26名) お問い合わせ: 高知医療センター・看護局 教育担当 FAX: 088 (837) 6766					
20	日	第25回(平成24年度第4回)高知医療センター地域がん診療連携拠点病院公開講座 (参加費無料、事前申込不要)			
		内容	お口のがんのはなし～早期発見と検診～	講師	高知医療センター 頭頸部疾患診療部長兼歯科口腔外科科長 立本行宏 先生
		内容	怖い皮膚がん、怖くない皮膚がん		高知医療センター 形成外科 科長 原田浩史 先生
		内容	もっと知ってほしい大腸がん		高知医療センター 消化器外科・一般外科 医長 寺石文則 先生
場所	高知共済会館3F大ホール(高知市本町5-3-20)	時間	14:00～16:30	対象 医療関係者、一般	
お問い合わせ: 高知医療センター・事務局 経営企画課(川田) TEL:088(837)3000(代) (内線6070)					
25	金	地域がん診療連携拠点病院機能強化事業 医療従事者研修 (参加費要、事前申込要)			
		内容	特別講演: 腹水難民を生み出すな! ～KM-CARTによる癌性腹水に対する積極的 症状緩和とオーダーメイド癌治療への活用～	講師	医療法人社団愛語会 要町病院 腹水治療センター長 松崎圭祐 先生
		場所	高知医療センター2F ころしおホール	時間	18:00～19:00
対象 医療関係者 主催: 高知医療センター・がんセンター お問い合わせ: 高知医療センター・事務局 経営企画課(川田) TEL:088(827)3000(代)					
26	土	第26回地域医療連携研修会 (参加費無料、事前申込不要)			
		内容	めまいの検査	講師	高知医療センター 臨床検査技師 西森由加里 氏
		内容	メニエール病の診察		高知医療センター 耳鼻咽喉科 科長 土井彰 先生
場所	高知医療センター 2F ころしおホール	時間	14:00～15:40	対象 医療関係者、一般	
お問い合わせ: 高知医療センター・地域医療連携室(井上、早瀬)					
27	日	アサーティブ・コミュニケーション研修会 (参加費無料、事前申込要。下記問い合わせ先までFAXにてお申し込みください。)			
		内容	アサーティブ・コミュニケーション	講師	(株)えな・ヒューマンサポート 森川早苗 氏
		場所	高知医療センター 1F 研修室2、3	時間	9:00～16:00
対象 看護職員、コメディカル(13名) お問い合わせ: 高知医療センター・看護局 教育担当(野中、田鍋) T FAX: 088(837)6766					

※時間等、変更になる場合もございますのでご了承ください。背景に色がついている講座は是非、地域の医療機関の皆さまにご参加いただきたいものとなっております。皆さまのご参加を心よりお待ちしております。

編集後記

新年あけましておめでとうございます。日頃より地域医療機関の皆さまには、患者さんのご紹介や転院を快くお引き受けいただき、深く感謝申し上げます。また、昨年も貴重なお時間を頂戴し、私どもの訪問依頼にも丁寧に対応して下さったこと、とてもありがたく思っております。日常業務の中では、声だけのつながりになりがちですが、お互いの顔を見ながら意見交換をさせていただくことは、相談しやすい関係性がさらに広がるうえに、交流が深まるきっかけともなり、『顔の見える連携』の重要性を実感しているところです。本年度は、くじらネットの活用や、地域医療連携室がお受けする緊急の紹介電話対応についてのご説明もさせていただいております。今後も引き続きつながりを持ち、より身近に感じていただけるよう努力していきたいと思っておりますので、どうぞよろしくお願い致します。(地域医療連携室室長 岡林)



平成25年1月1日発行
にじ 1月号(第87号)
責任者: 武田 明雄
編集人: 地域医療連携広報委員
特別編集委員
発行元: 地域医療センター
地域医療連携本部
印刷: 株式会社高陽堂印刷
高知県・高知市病院企業団立
高知医療センター
〒781-8555 高知県高知市池2125-1
TEL: 088 (837) 3000 (代)

広報誌「にじ」に関するご要望・ご意見をお寄せください。renkei@khsc.or.jp
Kochi Health Sciences Center Home Page : <http://www.khsc.or.jp/>